

西欧中世文書の史料論的研究：平成21年度研究成果 年次報告書

岡崎, 敦
九州大学大学院人文科学研究院：助教授

ディルケンス, アラン
ブリュッセル自由大学：教授

丹下, 栄
下関市立大学経済学部：教授

大浜, 聖香子
九州大学大学院人文科学府：大学院生

他

<https://hdl.handle.net/2324/1932628>

出版情報：2010-03
バージョン：
権利関係：

キルデリクス (†481) とクロヴィス (†511) —歴史叙述、考古学、文書作成—

アラン・ディルケンス
(岡崎敦訳)

政治的、制度的な観点からは、5世紀末から6世紀初めは、西ヨーロッパの歴史にとってもっとも重要な時期であります。もちろん、この時期が壊滅的な状況にあったというような図式を語る歴史家は、例外はのぞいて、いなくなりました。「ローマ帝国の衰退」や「蛮族の侵入」、さらには「中世初期の暗闇」についてすら、今日もはや語る人はいません。それでもなお、西方から皇帝が消えたことが何をもたらしたのかについて批判的に研究を行えば、なおいくつもの仮説が導きだせるのです。私は、ここで、グローバルな分析モデルを提示しようなどとはもちろん考えておりません。ただ、このゆっくりとした変容過程に関する、いくつかのテーマに限定してお話したいと思います。キルデリクスとクロヴィスという2人のフランク王についての資料群は、実際のところ、さまざまなことを教えてくれます。たとえば、皇帝がいなくなった帝国において、ローマと同盟関係にあったゲルマン人たちが占めていた地位、また、中央の諸制度や権力の行使において次第に顕著になっていた、事実上の地方分権化の様子などについてです。さらに、トゥルネで発見されたキルデリクスの墓と、パリのクロヴィスの墓とを比較することは、ローマ帝国を継承したゲルマン人の王国の一つであるメロヴィンク王国における、宗教・文化的諸慣習を研究するための、絶好の観測台となるのです。

フランク人。西ローマ帝国の同盟者

4世紀後半以来、帝国国境を越えてやってきた人々は、皇帝によって保証された同盟 *feodus* という契約関係を享受していました。このおかげで、彼ら同盟関係に入った人々は、帝国の国境内に定着し、自分たちの王や法、制度、さらには宗教を維持することができたのです。そのかわりに彼らに求められたのは、主として軍事的なものからなる、国家への奉仕でした。このタイプの合意は、ときには強制されたとはいえ、むしろしばしば、そこに大きな利益を見いだしたローマによって求められたものであり、結果として、ローマの土地にゲルマン人が永続的に定着することを促進しました。このことは、以下のことを意味しています。すなわち、同盟関係に入った人々が定着した地域が正確に画定されること（しばしば複数の都市支配領域 *civitas*、あるいは一つの属州全体）、つまり諸収入や土地が、在来のガロ＝ロマン住民と新来者の間で厳密な規定に基づいて配分されること、そして、属人法の原則のもとで、共住状況を律する法がきちんと定義されることなどです。このような同盟関係を享受した人々として、ヴィジ＝ゴート人、オストロ＝ゴート人、ブルグント人、そしてフランク人が数えられますが、彼らは、帝国との間にかわされた協約を全体としては忠実に守っていたのです。

他方、間違いなく多エトノス *polyethnique* 国家であったローマ帝国の成功は、大部分、その統合力に負っていました。これを象徴するのが、212年に発布された著名なカラカラ勅令で、帝国に在住するすべての自由人にローマ市民権を与えるものでした。「事実それ自体によってローマ人」という資格が一般化すると、次第に、地域意識や「野蛮な」出自を明示する現象が現れてきましたが、このような地理的・エトノス的な特殊性の強調も、ローマ市民資格に対立するものとは感じられてはいませんでした。「野蛮なくに」出身者の帝国への統合も、同じような反応を引き起こしましたが、それは、皇帝権力が、その官僚制的な分類好みの配慮から、新来者たちを、古典的なギリシア＝ロ

ローマ的基準で分類したことから、なおさらそうでした。というのも、新来者たちの公式な承認の基礎となったのは、エトノスごとの分類であったからです。パトリック・ギアリの素晴らしい表現を敷衍して言えば、「ローマの政治的・軍事的天分」のなかでも、もっとも長続きした成功とはいえば、それはゲルマン民族なるものの定義と創造であったというわけです。なぜなら、ローマ人以上に、ゲルマン人はエトノス的な一体性を持ってはいなかったのです。彼らは、まったく逆に、多エトノス的 *polyethnique* な政治・文化的諸集団を構成しており、それ自体、永遠に変容し続けていました。

エトノス生成に関しては、以上のように、「部族 *gentes*」の創造、確立、発展というダイナミックなプロセスであると考えられているのですが、通常以下の二種類の間集団が区別されます。一つは、カリスマ的な戦争指導者のまわりに、その時々集まった人々で、フランク人やアラマン人がこれにあたります。いま一つは、より古い形成物で、しばしば聖なるものとみなされた家系に属し、その起源を誇りにしながら、自ら進んで凝集力の要となる王によって指導される集団です。これには、ヴィジ＝ゴート人、オストロ＝ゴート人、ヴァンダル人などが該当します。したがって、語源的には「勇気ある者」あるいは「自由なる者」という意味のフランク人、同じく「すべての者たち」という意味のアラマン人について、その起源を遠い過去に探すことはできないのです。これらの名がカバーする人間集団は、何世紀も前からそこに住んでいたとしても、名前が現れるのはつい最近でしかありません。フランク王国が、西ローマ帝国の後継国家としての地位を確立したとしても、それは、キルデリクスとクロヴィスという2人のフランク王が、自らの周囲に、他のフランク人、たとえばカンブレやケルンのフランク人たちや、彼らが支配下に置くガロ＝ローマ人たちを次第に糾合していったからなのです。

実際、5世紀を通じて、西欧における皇帝権の弱体化が徐々に明白になるにつれ、ローマと同盟関係にあった人々の自立性は高まり、属州や都市においては、ローマのセナトール貴族たちの権力が高まりました。セナトール貴族たちは、ほとんど指導的役職を独占していたのです。それでも、行政ピラミッドの頂点として、かつ同盟者との協定の保証者としての皇帝が存在する限り、帝国の西部における統治には、ある種の凝集力が維持されていたのです。476年に、ロムルス・アウグストゥルスが廃位されましたが、彼が、800年のカール大帝の皇帝戴冠に先立つ、最後の西ローマ皇帝になろうとは、当時はまだ誰も知りませんでした。この廃位に続く数年間、行政上の流動化が生じ、事実上の地方分権への動きが加速しました。一方には、皇帝あるいは中央権力によって、最重要の役職に任命された古い貴族たちがいて、彼らは、自分たちに委ねられた統治システムを維持しようと試みながらも、自分たちの独立を最大限利用ししましたのです。他方、同盟関係にあった王たちやその配下の者たちはといえば、中央権力の消滅に乗じて、彼らの独立、さらには彼らに委ねられた領域に住むすべての人々の統治までも強化しようとしていました。

以上のように、5世紀末という時期は、皇帝のいない西ローマ帝国をどのように統治するかについての紛争によって特徴づけられます。理論的には東の皇帝の存在は意識されてはいましたが、この遠方の皇帝は、在地的な、あるいはますます地域化する権力実態を脅かすものではありませんでした。新しい支配者たちは、以前の状況への復帰をもたらすかもしれないというので、新しい皇帝からの任命を願ったり、あるいは彼を恐れたりしたのでしょうか。あるいは逆に、皇帝位の決定的な消滅を期待したり、実際に機能する政治システムを考え直そうとしていたのでしょうか。いずれにせよ、出来るだけ速やかに力関係を明白にしたり、出来る限り既存の諸構造を維持したりすることは、利益にかなうことでした。既存の諸構造は、たとえば、秩序の維持、道路の管理、税の徴収、宗教の実践などです。476年の事件の直後に死んだキルデリクス、および彼の息子であるクロヴィスの治世を位置づけ直さねばならないのは、このような歴史的コンテキストなのであります。

キルデリクス。歴史的人物

キルデリクスは、文字記録とともに、エスコー河右岸のトゥルネでの彼の墓の発見によって知られている人物で、実際この発見は大反響をよんだのです。文字史料によると、彼はおそらく 457/458 年に即位した活動的な王であり、460 年ごろにはすでに、ガリアのさまざまな地で、ローマ側にたって戦い勝利しました。第二ベルギカというローマ属州の首府であるランスの司教であったレミギウス（530 年死）は、伝統的なローマ貴族の敬うべき代表者でもありましたが、481-482 年ごろにクロヴィスにあてて書いた書簡の中で、キルデリクスを肯定的な言葉で讃えています。すなわち、第二ベルギカ属州の統治者としての経歴をたたえ、異教徒でありながら、ローマ指導層とカトリック教会との間に結んだ協力関係をよしとしているのです。それゆえ、ここにいるのは複雑な人物像なのですが、文字史料と考古学史料を組み合わせることで、ぼんやりとしたところは残るにせよ（おそらくいつでもそうでしょう）、彼の家系の出自や彼の権力について、よりよく分かるのです。この点では、私たちの主要な文字史料である『歴史十巻』、すなわち『フランク人の歴史』という名でよく知られ、6 世紀末にトゥール司教グレゴリウスによって著された著作は、とりわけて利用するのが難しい著作であることをまず指摘せねばなりません。

実際、グレゴリウスは、この最初のフランク王についてよく知らないと告白しているのです。彼を通してしか現在その存在が知られない、5 世紀の複数の歴史著作を利用しながら、彼は、王あるいは公たちの名を、特に系譜関係で整理することなく言及しています。すなわち、マルコメリス、スノ、それからリキメリスの息子テウドメリス、さらにクロギオと続き、「ある者たちの言うところによれば、キルデリクスがその息子であるメロヴェクスは、クロギオの家系から出た」、というのです。今日の歴史家たちは、メロヴィング王朝の名おやであり、神話的先祖であるメロヴェクスについて、その歴史的事実に懐疑的ですが、グレゴリウスは、この王がキルデリクスの父であることを疑っておらず、7 世紀にはこれは伝説的起源となることでしょう。メロヴィング家の王たちとは親戚関係にある他のフランク人王権も、同時期北ガリアに複数存在していました。たとえば、ケルン、カンブレ、それからおそらくはトングルには彼らの根拠地がありました。それゆえ、フランク人たちには、強固な神話的、ついでは歴史的系譜伝承がなく、ただ系譜の記憶のみが、メロヴィング宮廷になんとか維持され、グレゴリウスに伝えられたのではないでしょう。

いずれにせよ、すでに引用した聖レミギウスの書簡は、私たちに、以下のことを教えてくれます。キルデリクスは、「彼の親族と同様に」、当時はガリア軍司令官アエギディウスが担っていたローマ権力のために働く、第二ベルギカ属州の行政官であったというのです。ローマが、特に脅威にさらされた属州の秩序維持のために、蛮族の同盟者にたよることは珍しいことではありませんでした。多くの場合、そしてここでもそうであったと思われるが、公的な役職に任命することは、同盟者の忠誠に報いるとともに、彼らがある領域の権力を掌握することを制御するためでもありました。事実、かつて、クロギオが、第二ベルギカの北半分をすでに掌中に収めていたと主張されたこともあったのです。

ところで、グレゴリウスの言を信じれば、キルデリクスは、かつて 8 年間にわたりチューリングンに亡命し、その後自分の王国で王として返り咲きましたが、その直後に、彼が誘惑していたチューリングンの王ビュシヌスの妻バシナが彼のもとに走り、妊娠して生まれたのがクロヴィスであるといいます。信頼出来る証拠から、この亡命は事実存在したと考えられるのです。それは、おそらく、キルデリクスが、ローマにつかえる他のゲルマン人指導者たちにならって、拡張的な意図を持ち、アエギディウスによって断罪されたのでしょう。キルデリクスは、その父アエギディウスを継いだシャグリウスに対しても忠誠をつくし、464/465 年には、ロワール河方面で、ヴィジ=ゴート人やサクソン人を打ち破りました。

この当時、シャグリウスの任務は複雑さをまわしていました。彼についてグレゴリウスは、軍司令官ではなく「ローマ人の王」と形容しています。これはおそらく、476年以後は、西ローマ帝国はそのものとしては存在せず、軍司令官であったアエギディウスの息子は、もはや遠い東ローマ皇帝の権威を認めず、単独行動に踏み切っていたからでしょう。ところで、412年にガリア南部に到着した同盟者ヴィジ＝ゴート人たちは、ローマの権威を承認した上で、ピレネー山脈からロワール河に至る領域をみずからのものとし、そこに強力な王国を築いていました。ガリア東部はといえば、443年に、同盟者ブルグンド人が定着しています。というわけで、シャグリウスが直接統治していたのは、セーナ河とロワール河の間の地域のみであり、このような状況において、おそらくヴィジ＝ゴート人をロワール河以南に押しとどめるために、キルデリクスとの同盟関係が期待されたのでしょう。

考古学的な所与によって裏打ちされる僅かな文字史料から判断すれば、キルデリクスとシャグリウスとの間の関係は、次第に悪化したものと思われます。パトリック・ペランは、以下のような解釈を提示しています。520年ごろに著された『聖女ジュヌヴィエーヴ伝』が示唆するところによれば、フランク人たちは、セーナ河までその支配を拡張しようとして、パリに長い堡壘を築いたということです。第二ベルギカ属州南部で、キルデリクスの時代のフランク人に特有な、軍装と装身具を含む墓が発見されたことは、このことと関係があるでしょう。他方、ヴィジ＝ゴートのものと思われる考古学的遺物がこの地方で発見されたことは、思うに、ヴィジ＝ゴート人がフランク人を打ち破って、彼らをソムム河まで押し戻したことを示しているのではないのでしょうか。この際、ヴィジ＝ゴート人を呼び寄せたのはシャグリウス自身であったのです。彼は、当時、キルデリクスが押さえていた領域の何部に位置するソワソンに根拠を構えていました。2人の指導者の間の不和は、おそらく、より大きな政治的戦略のなかに位置づけられるものでしょう。すなわち、キルデリクスは、476年に最後の西ローマ皇帝ロムルス・アウグストゥルスを排したオドアケルの側につき、これに対して、シャグリウスは、最終的には、ヴィジ＝ゴート王アラリック2世と同盟することになりました。

キルデリクス。考古学発掘の寄与

キルデリクスの墓は、以上のような政治史的考察に、具体的な基盤を与えてくれます。この埋葬地は、1653年、トゥルネのサン＝ブリス教会近くで発見され、1655年にはただちに、人文主義者ジャン＝ジャック・シフレによって、学問的性格が大変高い書物において報告されました。

副葬品は、非常に豊富で、5世紀後半の中央ヨーロッパで発見された最上級の副葬品とよく似たものであり、素晴らしい七宝細工を含んでいます。これは、地中海起源とみられ、おそらくはイタリア、より正確には、当時、西ローマ皇帝の主要な宮廷の一つであったラヴェンナ製と想定されました。これは、パトリック・ペランとミシェル・カザンスキが最近提出した仮説です。彼らによれば、ゲルマン人のもとで伝来しながらも、「汎地中海モード」に属するこれらの七宝細工は、少なくとも部分的には、ゴンデバウドゥスやオドアケルといった、裕福な蛮族の顧客のために生産されたものということです。ところで、オドアケルとキルデリクスは、アラマン人に対する共同戦線をはっていました。以上から、これらの品々は、当時の習慣にある「外交的贈り物」の交換品であるかもしれないこと、そして、地中海製の七宝細工をフランク王が所持していたらしいことが、納得できるかたちで説明されるのです。

他方、金で出来た美しい十字架型の服の留め金は、ローマ末期の最上級のローマ行政官が所持していたものの特徴的な形式を示しています。ラテン語で「キルディリクス王 Childirici regis」という銘文をもつ、文書に印章を付すために用いられた指輪型の印章母型には、中央部に、長い髪を垂

らすとともに、よろいと上級行政官のマントを身につけた王の正面像が造形されています。この画像表現は、キルデリクスの同時代の王であった、ヴィジ＝ゴート王アラリック 2 世 (484-507)、さらにはオストロ＝ゴート王テオドリック 1 世 (473-526) の、おそらくは同じく印章母型として使われたと思われる陰刻彫石に掘られた人物像に酷似しています。この問題については、この報告の最後で再び論じましょう。

他方、1991 年になって行われたキルデリクスの墓周囲の発掘から、この墓が、おそらくは直径 20-40 メートルのかなり大きな墳丘であったことが判明しました。これは、スカンディナヴィアやダニューヴ河地域、さらにはアングロ＝サクソンのいわゆる「王の」巨大な墓にならったものとも考えられます。ミカエル・ミュラー＝ヴィレの言うところを信ずるならば、キルデリクスの墳丘墓は、大陸の西ヨーロッパにおけるもっとも古い「王の」墳丘墓ということになります。この慣習の起源については、東方に求めねばなりません。なぜなら、「王の」墳丘墓は、西欧の埋葬伝統としては、ローマにもゲルマンにも直接の先例がないからです。モデルとして検証されるのは、逆に、4 世紀末から 5 世紀初めの中央ヨーロッパにおいてです。これは、たとえば、モラヴィアのツランにある大きな墳丘墓についての最近の研究が教えてくれることです (ちなみに、このツランという場所から、ナポレオンがかのオーステルリッツの会戦を率いたのです)。直径 65 メートル、高さ 8-12 メートルに及ぶこの巨大な墳丘墓は、二つの玄室を含んでいます。かつては、ランゴバルド人に帰せられたこれらの施設の少なくとも一つは、400 年ごろのものともみなされています。さらに、もしかりに、ヨルダヌス [6 世紀のローマ官僚であり、作家としても著名] が言及する *tumuli* という用語が、墓一般を意味する普通名詞ではなく、まさに同時代の墳丘墓に対応するものであるとするなら、453 年にアッティラが葬られ、その上で埋葬の祭りが行われた *tumulus* の例も同様のものとして数え上げることができます。いずれにせよ、キルデリクスの *tumulus* の先例と考えられるものはすべて、中央ヨーロッパに位置しているのです。

1991 年の発掘では、キルデリクスの墓の周囲に馬が葬られていることも明らかになりましたが、これもまた、東ヨーロッパ独自の文化的特徴の一つです。墓の中、あるいは傍らに馬を埋葬する (あるいは配置する) という慣行は、西欧では、5 世紀末以後にしかほとんど見受けられませんが、東方においては、キルデリクスの時代の前でも後でも確認されます。馬の骨は、とりわけ、フン族の時代のステップでの墓でよく見られるものです。以上をまとめれば、キルデリクスの墓で確認される埋葬実践は、東方蛮族の影響を反映しており、それらのうちのいくつかは、ダニューヴ河中流域を経由して西欧に及んだものと思われるのです。

キルデリクスが中央ヨーロッパに亡命していたことは、以下のような説明を可能とします。すなわち、彼は、チューリングゲン人やその周辺の人々との接触によって、彼の墓で見つかった様々な軍装品、あるいは装飾品、とりわけ七宝細工を入手したこと、さらに、東方の巨大勢力のもとで行われていた、王の埋葬儀礼 (祭り) について知識を得たのではないかということです。この仮説は、また、以下の仮説を排除するものではありません。すなわち、キルデリクスは、同様に、オドアケル・サイドを通じて、彼の墓で発見された威信財のいくつかを手に入れたのかもしれませんが。あるいは、彼の死後、中央ヨーロッパの君主のもとで見られたような埋葬儀礼 (*tumulus*、馬の犠牲) が行われたとしたら、それは彼の妻バシナ、あるいはそのチューリングゲン出身の側近を介してのことであったかもしれません。

クロヴィス。その政治的趨勢

クロヴィスの治世を年代的に再現することもまた、同じく難しい問題を提起していますが、ここでもまた、同時代の書簡や年代記ではなく、トゥールのグレゴリウスによる『歴史十巻』が関係

しています。この書物は、王の死後 70 数年たって執筆されたものであり、また、歴史を語る年代記ではなくて、教化を目的とする普遍的・宗教的歴史なのです。さらに、グレゴリウスは、古典的ですが非常に人為的な 5 年ごとの年代区分を採用している上に、教化の上で重要と思われたエピソードを選択する一方で、おそらくは知り得ていた他の事件については沈黙を守っています。

クロヴィスの治世の初期に関しては、ほとんどなにも分かっていません。当初はキルデリクスから受け継いだ状況が続いていたものと思われます。しかし、486-487 年に、クロヴィスはシャグリウスをソワソンで打ち破り、さらに、彼の「ローマ帝国」を次第に浸食しながら、ロワール河にまで到達しました。考古学的成果も、ある程度、このフランク人の最初の征服を浮き彫りにしています。とりわけ、ソム河とセーヌ河の間で、しばしば豊富な武具を副葬品とする男性の埋葬、さらには、二つセットになった服の留め金という西方のゲルマン人の流行を思わせる女性の埋葬が確認されています。

トゥールのグレゴリウスが提示する年代によれば、クロヴィスが、場所は分からないながら、アラマン人と対峙して、カトリックの洗礼を受けてこれに勝利したのは、彼の治世の 15 年目のことでした。この問題については、後にまた論じることになります。ちなみに、現代の歴史叙述において、この戦闘がケルン近郊のトルビアックで行われたとしているのは誤りです。グレゴリウスは、この地名を、クロヴィスの洗礼との関係ではなく、アラマン人に対するいま一つ別の、のちに行われた戦いの場所として言及しているだけであるからです。

ここでは、5 世紀末から 6 世紀初頭における政治同盟関係の詳細に立ち入る余裕はありません。ごく簡単にまとめれば、クロヴィスとブルグント王ゴンデバウドゥスとの間の同盟関係に脅威を抱いたヴィジ=ゴート王アラリック 2 世は、オストロ=ゴート王テオドリックとの接近をはかり、緊張関係が生じたというわけです。テオドリックは、クロヴィスとアラリックとの間の会談を計らい、彼ら 2 人の王は、アンボワーズ近くのロワール河のある中の島で会見し、ともに食べ、飲み、友誼を誓い合ったのち、心に平和を抱いて分かれたといえます。しかしながら、ブルグント人やケルンのフランク人たちによって後押しされたクロヴィスは、ロワール河をわたって、ポワチエ近郊のヴィエにおいてヴィジ=ゴート人を打ち破ります (507 年)。彼は、この戦いのさなか、自らアラリック王を殺したということです。長男のテウドリクス、およびその義兄弟で、コンデバウドゥスの息子ジギスムンドゥスに委ねられたアキタニアの平定には時間がかかりました。

ヴィジ=ゴートを打ち破ったクロヴィスが、その凱旋をトゥールで祝ったのは 508 年のことでした。そこに、事情に通じたビザンツ皇帝アタナシウスの使者が現れ、クロヴィスにコンスルの榮譽を与えました。王は、緋色のチュニカをまとい、頭には冠 *diademe* を飾り、グレゴリウスによれば、以後、「コンスル *consul*」あるいは「アウグストゥス *Augustus*」と呼ばれたと言います。彼がパリを王国の首都としたのは、このころ、あるいはこのすぐのちのことであったと思われます。パリを選んだことは、おそらくここが聖女ジュヌヴィエーヌ埋葬の地であったことに促されたものだったでしょう。この聖女は、キルデリクス、さらにはクロヴィスとクロチルドと親しく、のちには、誕生しつつあったメロヴィング王朝の守護聖人となるのです。彼らは、彼女の墓の上に、のちにはサント=ジュヌヴィエーヴ教会となる聖使徒教会を建立し、一族の廟としました、この教会が使徒たちに捧げられていることは非常に象徴的な意味を有します。というのも、コンスタンティヌス以来、大多数の皇帝の遺骸を葬ったコンスタンティノーブルの教会もまた、聖使徒たちに捧げられていたからです。

クロヴィスは、その治世のおわりに、多くの立法的な措置を行いました。実際、ガロ=ローマ人と、フランク人や他のゲルマン出自の人々との間の関係を律する法式を、細かく規定する必要があったのです。法的観点から見れば、二つのシステムが共存し、それぞれ人的出自に応じて適用され

ました。ガロ＝ローマ人は、テオドシウス法典、ついではいわゆるアラリック法典にもとづくローマ法によって裁かれました。フランク人に関しては、クロヴィスは、500年、あるいはそのやや後に、サリカ法 *Pactus legis salicae* を文字化させましたが、これこそ、「サリカ法」の伝来するもっとも古いヴァージョンであり、おそらくは4世紀半ばにさかのぼると思われる、今は失われたテキストを増補したものです。このテキストの使用は、まず王国の北において、ついでフランク王国全体に広まっていきました。

この法的な処置と並行して、クロヴィスは、自らの有利となるように、複数存在したフランク王国の統一を実現しました。彼は、奸計および力づくで、彼の親族を追い落としていったのです。たとえば、シギベルトゥス、ケルンのクロデリクス、トングルのカラリクス、カンブレのラグナカリウスとリカリウス、ル・マンのリグノメルなどです。かくして、彼は、トゥールのグレゴリウスといういつもの証言者によれば、フランク王から、「フランク人たちの王 *Rex Francorum*」になったのです。クロヴィスの息子や孫たちもまた、彼の領域的政策を推し進めました。534年にはブルグンド王国、536年にはプロヴァンス王国が併合され、アキタニアの自立的傾向に対しては高圧的な抑圧が課されました。

ローマの同盟者としてのフランクの王権 *regnum* から始まり、以上のような経緯で形成された王国は、ある非常に重要な一点において、ローマ帝国とは根本的に異なります。すなわち、フランク王国の国家元首は王であって、彼は、その権力を、個人的な資格で彼に委ねられた行政職としてではなく、メロヴィング朝と形容されるクロヴィスの男性直系に法的に留保された世襲の地位にもとづいて、行使するのです。しかしながら、その他の点では、メロヴィング国家は、ローマ帝国と構造の上では連続しています。やむなくその範囲は狭まったとはいえ、行政制度の重要な部分を継承する一方で、ガロ＝ローマの大貴族家系を通常は尊重していたからです。

クロヴィス。洗礼の問題

歴史的な観点から見れば、クロヴィスの洗礼は、確かに、非常に重要な事件です。全般的な歴史状況はよく知られています。4世紀末以来、皇帝テオドシウスは、一連の補足的な諸策を通じて、カトリックというかたちのもとでのキリスト教を、ローマ帝国の公式の宗教としました。宗教の伝統的な諸形式の信奉者たちは、異教徒として、公的な役職から排除されました。異教信仰の建物は次第にうち捨てられ、ときには、教会に変わりました。しかしながら、すでに見たように、ローマ帝国の中に定着した同盟者たちは、自分たちの王、自分たちの法、自分たちの慣習、そして自分たちの宗教を守ることができました。ある者たちは、フランク人のように、伝統的な信仰や礼拝行為を守り、別の者たちは、ヴィジ＝ゴート人やヴァンダル人たちのように、アリウス派、あるいはそれに近い宗派に、すなわち異端とみなされていたにせよ、キリスト教に改宗しました。大部分はアリウス派であったブルグンド人のなかには、多くのカトリックもおり、そこには王家のメンバーも含まれていました。同盟関係にあるゲルマン人と、とりわけガロ＝ローマ人からなるローマ系住民との関係は、基本的には平和なものでしたが、ときには緊張関係が走り、紛争も生じました。このような場合には、他の要因、主として法的な問題とともに、宗教が非常に重要な区別の標識とみなされました。

クロヴィスの洗礼に関する問題は、以下のようなかたちで提起されます。フランク人は、異教にとどまるのか、あるいは逆に、キリスト教に改宗するのか。改宗するとして、カトリックなのか、あるいはアリウス派なのか。前者は、ローマ帝国の、すなわちフランク人が何十年もの間ともに暮らしてきたガロ＝ローマの貴族たちの宗教です。後者は、ヴィジ＝ゴートのアラリック2世や、オストロ＝ゴートのテオドリックのように、周辺の同盟者王が採用した宗派です。キルデリクスは、

キリスト教徒ではありませんでしたが、2人の最上級のガロ＝ローマ貴族ととりわけ強い絆で結ばれていました。すなわち、聖女ジュヌヴィエーヴ(502年死)と、ランス司教レミギウス(530年死)です。クロヴィスは、ブルグンド王の娘でカトリックであったクロチルドと結婚していましたが、他方、少なくとも彼女の姉妹の1人は、アリウス派で(レンティルド)、さらにもう1人は、テオドリックとの結婚に際して、アリウス派に宗旨替えしています(アウドフレド)。

クロヴィスの宗教上の選択について教えてくれる主要な史料もまた、トゥールのグレゴリウスの『歴史十巻』です。ところで、グレゴリウスは、年代的順序をかなり自由に取り扱っているだけでなく、なにより歴史というジャンルに忠実で、彼の物語りの最重要人物の何人かを、特定の類型に明確に造形し直して提示しています。というわけで、クロヴィスは、コンスタンティヌス皇帝の再来として表現され、そのカトリックへの改宗こそが、フランク人の政治的成功をもたらしたとされます。グレゴリウスは、クロヴィスの生涯について、間違いなく自身で情報を得ていましたが、彼の叙述は、おそらくクロディルドについての物語りに多くを負っています。彼女は、夫の死後(511年)は、トゥールの聖マルティヌスの墓廟の傍らに隠棲したのです。

グレゴリウスの言を信ずるならば、クロヴィスの治世は30年続き、これは481年から511年までとなります。496年までの最初の15年の間、彼は、父と同じく異教徒でしたが、妻と聖レミギウスの感化で、カトリックには前向きに感じるところがあったように書かれています。著名なソワソンの壺のエピソードは、このカトリックよりの図式に位置づけられた話なのです。治世の15年目、すなわち496年に、帰趨がはっきりしないアラマン人との戦いが、彼の改宗の決断を促したとされますが、この点については、ミルヴィウス橋での戦いにおけるコンスタンティヌスとの類似性が明らかです。まさにこの勝利を得るために宗教的な力の恩恵を受けた後、クロヴィスは、クリスマスに、ランスでレミギウスによって洗礼を授けられたといわれます。クロヴィスの治世後半は、神に加護された君主の成功物語りです。彼が、ヴィエで、ヴィジ＝ゴート王アラリック2世を打ち破った戦いは(807年)、異端アリウス派に対するカトリックの優位性を明白な形で証拠だてるものとして提示されています。とりわけ、クロヴィスは、戦闘にさきだって、トゥールの聖マルティヌスの墓や、ポワチエのイラリウスの墓を詣でているからで、とりわけ聖イラリウスは、反アリウス派として著名な人物でした。

以上のような年代、および叙述の図式の正当性について、歴史家は長らく懐疑的なままです。たとえばアラマン人との戦いは二度行われたとする、フランク以外の同時代史料とうまく接合しないからです。498年という年代については、大方の同意を得ていましたが、他方、非常な説得力をもって、クロヴィスは、一時、アリウス派に引きつけられていたとの仮定も提起されたことがあります(ウッド)。

マルティン・ハインツェルマンをはじめとする、トゥールのグレゴリウス著作についての研究のおかげで、グレゴリウスの作業のやり方についての理解が深まる一方で、ヴィエンヌ司教アヴィトゥスやカシオドルスの書簡等の、5-6世紀の書簡史料の研究は、重要な資料の年代決定の再検討を促しています。たとえば、イアン・ウッドとダヌータ・シャンザーは、アヴィトゥス(518年死)の書簡集を検討して、著名な書簡の年代を変更しました。司教が、クロヴィスの洗礼を祝い、招待された儀式に出席出来ないことを詫びているこの書簡は、501年、あるいは508年以前ではありえないことを証明したのです。今日、洗礼については、もっと遅い年代を仮定することが支配的な傾向となっています。506年以後、おそらくは508年のクリスマスというわけです。

新しく提示されたこの508年という年代は、いくつかの問題を提起します。これらの大部分については、ちょうどコンスタンティヌスの場合と同じように、個人的な改宗は、洗礼という儀式の何年も前のことでありうるということを読み起こせば、疑問は解消します。他方、クロヴィスが、カ

トリックになった最初のゲルマン人王であるという点については、未来の（この時点ではまだ王ではなかったのですが）ブルグンド王ジギスムンドゥス [516-523]の方が早かったこととなります。彼の改宗はおそらく 501 年から 502 年、洗礼は 507 年以前に位置づけられるからです。ヴィエの戦いについては、これが、反アリウス戦争であったとはまったく言えません。両軍ともに、カトリックとアリウス派がいたからです。ただし、宗教的な議論が、クロヴィスに有利なプロパガンダとして使われたことはありえます。最後に、クロヴィスの決定の政治的な重みについても、相対化されねばなりません。クロヴィスとクロティルドの息子たちは、父親の洗礼に先立ってカトリックで洗礼を受けているのです。クロヴィスの洗礼に関わりなく、フランク王国がカトリックとなるという政治的な方向性は、すでに定まっていたと考えられます。

クロヴィスの洗礼が、個人的な確信にもとづくのか、あるいは政治的なオポルチュニズムにすぎないのか、意見はいろいろですが、確実なところは永遠に謎でしょう。いずれにせよ、これが、重要な象徴的役割を演じたことは確かです。この事件のおかげで、ある重要な教会会議を、フランクとヴィジ＝ゴート両王国の境界に近いオルレアンで開催することが、容易になったはずであるからです。この会議は、511 年に開催され、王自身が議題を定めましたが、そこには、彼の主要な宗教的関心事が反映しています。洗礼はまた、王が、パリの聖使徒教会、聖女ジュネヴィエーヴの墓の近くに葬られたことを説明します。最後に、クロヴィスの洗礼は、フランク王国の統一に際して、阻害要因となったかもしれない宗教的緊張を取り除く助けとなりました。

印章と指輪型印章母型。メロヴィング期の文書生産をめぐる考察に対する一つの手がかり

500 年ごろを対象としたこの報告の結びとして、新しい研究の可能性がつい最近示唆された研究の手がかりを、一つ簡単にご紹介したいと思います。メロヴィング期の印章と、指輪型印章母型です。

キルデリクス、あるいはクロヴィスの治世期にさかのぼる文書あるいは書簡のオリジナル史料は、現在まったく伝来していません。しかしながら、第一に、キルデリクスの指輪型印章母型の発見と、第二に、クロヴィスがやりとりしたいくつかの書簡のおかげで、メロヴィング王国の初期には、ローマ末期の文書慣行が依然として続いていたことが分かるのです。

クロヴィスについては、ただ一通だけ書簡テキストが伝来しています。これは、507 年と 511 年の間、おそらく 507 年直後に、彼の王国 *regnum* の司教たちに宛てた書簡であって、この年までヴィジ＝ゴートの支配下にあったガリアの地方における、聖職者、修道女、教会に庇護された寡婦、教会の奴隷に対する王の保護をその内容とします。これによると、司教たちは、彼らの請願を、誓約および、彼らの指輪の刻印を持つ文書によって確かなものとするを求められています。「もし汝が、汝の指輪の印が下部に付された汝の書簡を真正なものと判断するなら」。ここで用いられている用語の意味は明確ではっきりとしています。持ち出された証拠の真実性、文書の法的有効性は、個人の印章が付された、おそらくはパピルスに認められていた文書によっていたのです。ところで、メロヴィング期について、非常に多くの指輪型印章母型が伝来しています。つい最近、レーヌ・ハジャディによって、ガリア北部のメロヴィング期の指輪の目録が作成される一方、メロヴィング王の指輪型印章母型についても、アクセル・ヴェーバーという私的な収集家が研究を公表しました。これらの指輪のなかには、ローマの陰刻彫石を再利用したものもありますが、大部分は、表面に、非常に単純化されたモチーフか、あるいはこれに加えて、組み合わせ文字が造形されています。ちなみに、後者については、しばしばその読みの困難が提起されています。

他方、非常に精巧につくられたいくつかの指輪については、これが人物の半身像を提示していることもあります。ときには図式的に描かれているこれらの像には、しばしば、長い髪や特徴的な武

器、衣服といった特有のしるし、あるいは銘文が付随しています。たとえば、先ほど引用したクロヴィスの書簡とほとんど同時代の、キルデリクス王の指輪型印章母型は、正面を向いた王の半身像が造形されており、そこにはラテン語属格形で示された王の名前が見えます。この指輪のオリジナルは現在失われてしまいましたが、刻印がいくつかと複製が一つ残されました。同時代の陰刻彫刻で、図像的によく似たものとしては、オストロ＝ゴートのテオドリック王、ヴィジ＝ゴートのアラリック 2 世のものが伝来しています。これらの物件は、確かに、ローマ帝国の後継国家における文字の地位をはっきりと示すものです。

いくつかのメロヴィング王の指輪型印章母型や、オリジナル文書に残るいくつかのメロヴィング期の印章についての研究が進めば、6 世紀から 8 世紀半ばにおけるフランス王国に関する省察はより深まることでしょう。

Orientation bibliographique

- Pierre COURCELLE, *Histoire littéraire des grandes invasions germaniques*. Paris, 19643.
- Alain DIERKENS et Patrick PÉRIN, « The 5th-Century Advance of the Franks in Belgica Secunda : History and Archaeology », dans Ernst TAAYKE et al. (éds), *Essays on the Early Franks*. Eelde, Barkhuis Publ., 2003 (Groningen Archaeological Studies, I), p. 165-193.
- Alain DIERKENS, « Le baptême de Clovis (Noël 508 ?) », dans Jean-Jacques AILLAGON (avec la coll. d'Umberto ROBERTO et Yann RIVIÈRE) (éds), *Rome et les Barbares. La naissance d'un nouveau monde*. Milan, Skira, 2008, p. 350 - 351 et 626.
- Bruno DUMÉZIL, *Les racines chrétiennes de l'Europe. Conversion et liberté dans les royaumes barbares, Ve – VIIIe siècle*. Paris, 2005.
- Eugen EWIG, *Die Merowinger und das Frankenreich*. Stuttgart, Kohlhammer, 1988, 20014 (Kohlhammer Urban-Taschenbücher, 392).
- Patrick GEARY, *Quand les nations refont l'histoire. L'invention des origines médiévales de l'Europe. (trad. fr. de The Myth of Nations. The Medieval Origins of Europe)* Paris, Flammarion, 2004.
- Reine HADJADJ, *Bagues mérovingiennes. Gaule du Nord*. Paris, éd. Les Cheval-Légers, 2007.
- Martin HEINZELMANN, *Gregor von Tours (538-594). 'Zehn Bücher Geschichte'. Historiographie und Gesellschaftskonzept im 6. Jahrhundert*. Darmstadt, 1994.
- Stéphane LEBECQ, *Nouvelle histoire de la France médiévale, t. 1 : Les origines franques, Ve – IXe siècle*. Paris, Seuil, 1990 (Points-Histoire, H 201).
- Régine LE JAN, *Les Mérovingiens*. Paris, PUF, 2006 (Que sais-je ?, 1238).
- *L'Or des princes barbares. Du Caucase à la Gaule, Ve siècle après J.-C.* Cat. exposition Saint-Germain-en-Laye. Paris, 2000.
- Patrick PÉRIN et Laure-Charlotte FEFFER, *Les Francs*. Paris, Armand Colin, 19972.
- Patrick PÉRIN, « La tombe de Clovis », dans *Media in Francia ... Recueil de Mélanges offert à Karl Ferdinand Werner*. Maulévrier, 1989, p. 363-378.
- Walter POHL, « Aux origines d'une Europe ethnique. Transformations d'identités entre Antiquité et Moyen Âge », dans *Annales HSS*, t. 60, fasc. 1, janvier-février 2005, p. 183 - 208.
- Michel ROUCHE, *Clovis*. Paris, 1996.
- Michel ROUCHE (éd.), *Clovis. Histoire et mémoire*. Paris, 2 vol., 1997.
- Danuta SHANZER, « Dating the Baptism of Clovis : The Bishop of Vienne vs. The Bishop of Tours », dans

Early Medieval Europe, t. 7, 1998, p. 29-57.

- Danuta SHANZER et Ian WOOD, *Avitus of Vienne. Letters and Selected Prose*. Liverpool, 2002.

- Axel G. WEBER, *Der Childebert-Ring und andere frühmittelalterliche Siegelringe*. Cologne, chez l'Auteur (diff. Berlin, Wasmuth), 2007.

- Karl Ferdinand WERNER, *Histoire de France*, t. 1 : *Les origines (avant l'an mil)*. Paris, Fayard, 1985.

- Ian WOOD, *The Merovingian Kingdoms, 450 – 751*. Londres - New York, Longman, 1994.

- Ian WOOD, « Gregory of Tours and Clovis », dans *Revue Belge de Philologie et d'Histoire*, t. 63, 1985, p. 249-272.